

## [研究ノート]

# グルメ漫画の男女登場人物に割り当てられる 「うまい」と「おいしい」

— 社会的規範の遵守と逸脱<sup>1)</sup> —

稲永 知世

### 要旨

本稿では、「うまい」「おいしい」といった味覚評価表現とジェンダーの関係性に注目し、グルメ漫画において、女性および男性登場人物に「うまい」「おいしい」が割り当てられる際の文脈を分析し、この選択が登場人物による社会的規範の遵守、あるいは逸脱と関係しているのかを考察した。分析の結果、女性登場人物の場合、「女性（らしい見た目の人）は女らしく振る舞うべきだ」という女らしさに関わる社会的規範が「おいしい」「うまい」の割り当てに大きく影響している一方、男性登場人物の場合、男らしさに関する社会的規範よりも親疎関係あるいは権力関係に関わる社会的規範が「うまい」「おいしい」の割り当てに影響していることを明らかにした。

### キーワード

うまい、おいしい、ジェンダー、役割語、グルメ漫画

## 1. はじめに

人は飲食物を口にし、その飲食物に対して美味しさを感じた場合、その美味しさをどのように表現するのだろうか。そして、どのように表現すると認識されているのだろうか。たとえば、辞典では、「うまい」「おいしい」といった味を評価する味ことば（以降、味覚評価表現）の使用に関して、以下のよう

うまい【旨い】「味がよい」意の普通の表現だったが、「おいしい」が多用されるにつれて、男性がぐだけた会話などで使う少しぞんざいな響き

を感じさせることばになってきている。(『日本語 語感の辞典』)

おいしい【美味しい】「味がよい」意の上品な表現だったが、今では男性でも多用するようになり、普通のことばに近づきつつある。(『日本語 語感の辞典』)

味の良さを表わす場合、類義語「おいしい」が、古語「いしい」の女房詞に由来する語であることもあって、現代共通語では、女性は「うまい」より「おいしい」を使う傾向がある。(『精選版 日本国語大辞典』「うまい」の補注)

上記の説明から、人が飲食物の良し悪しを表現するのに、「うまい」を選択するのか、それとも「おいしい」を選択するのかは、ジェンダーに左右される、とりわけ「うまい」は男性との結びつきが強いと考えられそうである。ただし、女性は絶対に「うまい」を使用しないのか。そうではない。筆者は、自分のジェンダー・アイデンティティを女性として認識しているが、「うまい」も使用する。そこで、グルメ漫画『ワカコ酒』における「やっば骨のまわりうめーわ」(3巻・64夜「スベアリブ」)を読んだ際、このセリフを発した人物としてどのような人物を思い浮かべるだろうか。何の補足情報もなければ、話し手としてまず思い浮かべるのは、男性ではないだろうか。だが、このセリフが実際に割り当てられているのは、26歳の女性登場人物である。現実世界では、女性も「うまい」を使用することがあるにも関わらず、男性を思い浮かべる可能性が高そうなのはなぜだろうか。私たちは、「女なら『おいしい』と言うべきだ」「男なら『うまい』と言うべきだ」という規範に影響を受けて、味覚評価表現を使用したり、誰かに割り当てたりしている可能性がある。無論、「うまい」「おいしい」の選択に絡むのは、ジェンダーだけではなく、さまざまな要因(年齢、職業など)がこの選択に影響を及ぼす。そのなかで、稲永(2022)は、グルメ漫画の多くを定量的にまた定性的に分析することで、男性登場人物には「うまい」系、女性登場人物には「おいしい」系が割り当てられる傾向にあるという結果を明らかにした。しかしながら、稲永(2022)では、この傾向がどのような要因から生まれるのかについては、十分な議論が行われていなかった。そこで、本稿では、金水(2023)

の「役割語」、中村（2001）の「抽象的規範」という概念を用いて、「うまい」「おいしい」といった味覚評価表現とジェンダーの関係に注目し、グルメ漫画において、女性および男性登場人物に「うまい」「おいしい」が割り当てられる際の文脈を分析し、この選択が登場人物による社会的規範の遵守あるいは逸脱と関係しているのかを考察する。

以降、第二節では、「うまい」「おいしい」といった味覚評価表現とジェンダーに関係する先行研究を概観したうえで、本稿にとって重要な概念である「役割語」を取りあげる。つづいて、第三節では、どのような文脈において、「うまい」「おいしい」が女性および男性登場人物に割り当てられているかを分析する。最後に、第四節では、第三節の結果を踏まえて、女性および男性登場人物に割り当てられる「うまい」「おいしい」の選択が、登場人物による社会的規範の遵守、あるいは逸脱と関係しているのかを考察する。

## 2. 先行研究

まず、高崎（2012）は、随筆と自然談話を分析データとして、「おいしい」「うまい」「美味」の使用実態と使用主体の性との関わりについて考察している。そのなかで、高崎は、「男性（あるいはそれに想定される書き手・話し手）も『おいしい』を使っていることは確かである。現象としては女性の『うまい』使用が話題としても注目度が高いにせよ、実は男性の『おいしい』使用にも注目すべき」（2012, p. 65）であると主張する。つぎに、郡（2017）は、「おいしい」と「うまい」が性差による使い分けだけではなく、それぞれの役割や機能が追加されてきているのではないかという観点から、ビール広告ポスターを分析し、「ぞんざい」「上品」といった印象や語感、「うまい」特有の機能面について考察している。そこで、ビール広告ポスターにおける「うまい」の使用がジェンダーと結びついているわけではなく、「うまい」は「相手に直接的に断定的に訴える語であり、より効果的な発信力がある語として、扱われていた可能性が大きい」（2017, p. 5）と述べる。高崎（2012, p. 65）でも、『うまい』は、ぞんざいだが、それだけに飾らない、実感のこもった味覚評価語として、かえって普通の語として位置づけられる可能性」が示され

ているように、現実世界においては、「うまい」と男性との結びつきが弱い(あるいは、弱くなりつつある)可能性がある。

最後に、稲永(2022)は、味ことばに関する規範と現実の落差をのぞくため、「うまい」「おいしい」といった味覚評価表現とジェンダーの関係性に焦点を当て、グルメ漫画およびグルメ番組における男女の味ことばを定量的・定性的に分析した。その結果、グルメ番組という現実の世界では、男女ともに「おいしい」の使用が多い一方、グルメ漫画という「仮想現実」(金水, 2023, p. 37)の世界では、「女性は『おいしい』系、男性は『うまい』系を用いる傾向が強い」(2022, p. 147)ことを明らかにした。この分析結果、および辞典における「うまい」「おいしい」に関する記述(第一節参照)は、グルメ漫画という仮想現実の世界において、「うまい」が男性の役割語として認識されている可能性<sup>2)</sup>を示唆している。

役割語とは、以下のようなときに使用される言葉づかいのことである:「ある特定の言葉づかい(語彙・語法・言い回し・イントネーション等)を聞くと特定の人物像(年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等)を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができる」(金水, 2023, p. 203)。そして、中村は、役割語のひとつである女ことばを「女が実際に使っている言葉づかいではなく、抽象的な規範」(2001, p. 202)として捉える。つまり、中村の議論を下敷きにすると、「うまい」が男性の役割語(そして、「おいしい」が女性の役割語)として認識されているということは、「うまい」「おいしい」は実際に男女が使っている言葉づかいというだけでなく、味覚評価を行う際の規範でもあるということである。この可能性を検証するには、どのような文脈において女性および男性登場人物に「うまい」「おいしい」が割り当てられているのかを分析する必要がある。そこで、本稿は、定量的・定性的調査である稲永(2022)が分析対象としたグルメ漫画の種類・冊数を増やし、「うまい」「おいしい」がある種の役割語として認識されているという仮定のもと、以下の点を定性的に分析することにより、その割り当てにはどのような規範が作用している可能性があるかを考察する:

グルメ漫画の男女登場人物に割り当てられる「うまい」と「おいしい」（稲永 知世）

- a. 女性登場人物に割り当てられる「おいしい」「うまい」はどのような「役割語」としての機能を果たしているのか、またそれにはどのような社会的規範が働いているのか（あるいは、いないのか）
- b. a. とは対照的に、男性登場人物に割り当てられる「うまい」「おいしい」はどのような「役割語」としての機能を果たしているのか、またそれにはどのような社会的規範が働いているのか（あるいは、いないのか）

### 3. 事例分析

本稿は、主人公を含めた登場人物が、飲食店に出向き、そこで食事をする（あるいは酒を飲む）場面が中心となるグルメ漫画を分析する。そして、本稿が分析対象とするグルメ漫画は、表1のとおりである（2023年7月時点）：

表1 グルメ漫画の作品タイトル（巻数）・作者・出版社

作品タイトル（巻数）	作者	出版社
『忘却のサチコ』（1～19）	阿部潤	小学館
『ワカコ酒』（1～20）	新久千映	コアミックス
『孤独のグルメ』（全2巻）	谷口ジロー（作画）・久住昌之（原作）	扶桑社
『深夜食堂』（1～26）	安部夜郎	小学館
『大衆酒場ワカオ ワカコ酒別店』（全7巻）	猫原ねんず（作画）・新久千映（原作）	コアミックス

#### 3.1 女性に割り当てられる「おいしい」と「うまい」と社会的規範

稲永（2022, p. 136）は、グルメ漫画では、女性登場人物には「うまい」よりも「おいしい」が割り当てられる傾向にあることを明らかにした（「おいしい」系44.57%、「うまい」系28.05%、その他27.38%）。そこで、本節では、味覚評価表現と女らしさに関する社会的規範との結びつきに注目し、どのような文脈において女性登場人物に「おいしい」が割り当てられているかを分析する。まず、女性登場人物に「おいしい」が割り当てられる際、「女性（らしい見た目の人）は女らしく振る舞うべきだ」という社会的規範への遵守が見

受けられる場合がある。『深夜食堂』23巻・第314夜「そうめん」において、二丁目のゲイバー「紫の上」勤務のジュンちゃん（ニューハーフ<sup>3)</sup>）がのりの佃煮、またはたらこのマヨネーズ和えをのせたそうめんを食べながら発する「あらおいしい」に注目する。ジュンちゃんは「おいしい」の前に感動詞「あら」を使用する。この「あら」は、「現代では主として女性が用いる」（『精選版 日本国語大辞典』）とされる女ことばである。「あらおいしい」と発した後、ジュンちゃんは、そうめんの新たな食べ方を説明するため、「オリーブオイルと塩で食べるとおいしいんだってラジオで言ってたわ」と発する。ここでも、ジュンちゃんの発話には、女ことばの特徴とされる終助詞「わ」（古川, 2024, p. 30）が割り当てられているのである。ジュンちゃんは、女らしいとされるような服装をし、また吉田くん（男性）と交際している。ただし、ジュンちゃんが、シス男性で同性愛者であり、トランスヴェスタイト（異性装者）であるのか、あるいはトランス女性で異性愛者であるのかなどは不明である。いずれにしても、ジュンちゃんは、「女性（らしい見た目の人）は女らしく振る舞うべきだ」という社会的規範に則った話し方をする人物として描かれているのである。その他の場面でも、ジュンちゃんは「おいしい」を使用している：「どーして！こんなに美味しいのに！」（6巻・第80夜「サバのみそ煮」）。

そして、女性登場人物の幼さあるいは色っぽさなどを表象する際に、「おいしい」が割り当てられ、さらには「おいしい」を正確に発音できないさまが描かれる場合がある。『深夜食堂』10巻・第136夜「菜の花のからし和え」において、菜乃子（女性）が、菜の花のからし和えを食べて、主人公・「めしや」を営むマスターに満面の笑みを向けながら発する「おいちい」に注目する。この「おいちい」は、「おいしい」の「し」を「ち」に変えた幼児語である。これは、菜乃子が子どもの頃に読んだ絵本に関するストーリーと相まって、菜乃子の幼さを表象する。

対照的に、男性登場人物の場合、以下のような場面を除いて、「おいしい」を正確に発音できないさまが描かれることはない。『深夜食堂』2巻・第29夜「プリン」では、麻雀帰りに「めしや」に立ち寄る西山さん、東田さん、南さん、北村さんが描かれる。この4人の間には、その日の麻雀の勝者のみ

がプリンを食べられるという暗黙のルールがあるのだが、ある日勝者となった北村さんが3人にプリンを見せびらかしながら「おー、おいちい。／でもあげない。」と発する。この「おいちい」は、3人をからかうために意図的に使用されたものである。このことは、女性登場人物の幼さあるいは色っぽさなどを表す、つまり「大人であればこう話すであろう」という社会的規範からの逸脱を描く際にのみ、女性登場人物に「おいしい」の幼児語が割り当てられている可能性を示唆している。

つぎに、女性登場人物に割り当てられる「うまい」に注目する。何かを口に入れて、その美味しさを思わず声に出してしまう場合には、女性登場人物にも「うまい」が割り当てられる。たとえば、『ワカコ酒』2巻・35夜「チーズ天」で、主人公・村崎ワカコ（女性）は、夏の暑い日にビールを啣るため立ち飲み屋に入る。そこで、チーズ天を食べる前に瓶ビールを飲み、思わず「うめー—————」と発するのである。さらに、『忘却のサチコ』1巻・第1歩「開戦のサバ味噌」における主人公・佐々木幸子（女性）が使用する味覚評価表現をとりあげる。「おいしい」と「うまい」の使用数を比較すると、幸子は「おいしい」を頻繁に使用する（稲永, 2022）。しかし、漫画の序盤では、幸子は「うまい」を多用しているのである。第1歩の冒頭、結婚式の最中に幸子の恋人・俊吾が手紙を残して逃亡する。仕事に復帰した幸子は、同僚たちに対して気丈に振る舞っているものの、実は俊吾の逃亡にショックを受けていたことに気づく。その時、幸子は竹田食堂という名の食堂に入り、サバの味噌煮定食を注文する。サバの味噌煮を食べて、幸子はその美味しさだけでなく、俊吾のことを忘れる一瞬が訪れていたことにも気づく（「今… 私… 俊吾さんのこと 忘れてた……？」）。俊吾のことを忘れていたその瞬間に、幸子は「うまかつた」と発していたのである。つまり、ここで幸子が使用する「うまい」も、無意識のうちに口から出てしまったという、実感のこもった味覚評価表現と言える。1巻・第3歩「健さんの出所めし」まで、幸子が使用する味覚評価表現は「うまい」で占められている（「う…うまい……／刑期を終えた体にしみわたる」）。当該漫画のこの時点までは、「幸子が俊吾のことを忘れる瞬間に出会うためにおいしいものを食べる（飲む）」ことに力点が置かれていたが、以降は幸子に「おいしい」やその他の味覚評価

表現がより多く割り当てられるようになり（「ほっこりしていて体にしみ渡るおいしさね！！」6巻・第58歩「自炊にトライ！湯治旅・中編〈盛岡・花巻〉）、「幸子がおいしい飲食物をいかに解説するのか」に比重が置かれるようになったことを示唆しているのではないかと考えられる。

最後に、女性登場人物に「うまい」が割り当てられる際、「女性（らしい見た目の人）は女らしく振る舞うべきだ」という社会的規範からの逸脱を意味する場合がある（稲永, 2022）。『深夜食堂』1巻・第12夜「キューリのぬか漬け」において、プロレスチャンピオンであるリョーマ藤崎（女性）がキューリのぬか漬けを食べながら発する「これが一番うめえや」に注目する。第12夜の冒頭、リョーマ藤崎は、路上ライブ中に男性たちから殴られている将平（男性）を助け出す強い女性として表象されている。将平を助けたあと、リョーマ藤崎は、「ちわース」と言いながら将平を引き連れてお店に入ってくる。その際、「入れよ」という命令形を使用して、お店に入るようにと将平に指示する。そして、将平がキューリのぬか漬けを丸ごと手づかみで食べるリョーマ藤崎の姿を見てみると、彼女は将平に「ジロジロ見んじゃねーよ！」「ジロジロ見んかって言ってんだろ!？」と言う。つまり、強い女性であるリョーマ藤崎には男ことばが割り当てられていることがわかる。

その後、リョーマ藤崎は将平と恋人同士になり、一緒に暮らし始めると、キューリのぬか漬けを切った状態で食べるようになる（「ぬか漬け……あっ、マスター、切ってくれる?」）。さらに、「やだぁ〜ハハハ」「将平、デビューが決まったの!」といった女ことばを使用するようになる。ここでは、周囲の客の反応も注目に値する。同じ店にいる周囲の客がリョーマ藤崎を見て、「リョーマ藤崎、この頃女っぽくなったなあ」「うん、まつ毛も立ってるし」と発する。これらの発話から、リョーマ藤崎が「(雰囲気や態度、言動、見た目に関して)女しくなった」と周囲の客から認識されていることがわかる。また、このことは、周囲の客がこれまでのリョーマ藤崎を「(特定の意味において)女しくない」と認識していたことも意味する。リョーマ藤崎は、結婚を機に一度プロレスラーを引退するものの、将平の浮気をきっかけにプロレス界に復帰することとなる。そして、最後の場面にて、リョーマ藤崎はキューリのぬか漬けを丸ごと手づかみで食べながら「これが一番うめえや」

と発するのである。つまり、リョーマ藤崎の言語使用の変化（および、見た目・食べ方の変化）が、彼女の「男らしさ」から「女らしさ」への変化、そして「男らしさ」へ戻るといふ変化を表しており、「女らしさから逸脱すること」と『『うまい』系の味覚評価表現を使用すること』が結びつけられていると言える<sup>4)</sup>。そして、「うまい」系については、「おいしい」系の場合とは異なり、女性的感動詞や終助詞との共起はみられなかった。

### 3.2 男性に割り当てられる「うまい」と「おいしい」と社会的規範

まず、稲永（2022, p. 136）によると、グルメ漫画では、男性登場人物には主に「うまい」が割り当てられる（「おいしい」系11.1%、「うまい」系78.4%、その他10.5%）。そのなかでも、男性登場人物とその対話者が親の関係にある場合（「やっぱここの焼き物は一番うまいなあ『大衆酒場ワカオ』5巻・SP「止まない雨」）、また男性登場人物が権力関係において上に位置づけられる場合に、男性登場人物に「うまい」が割り当てられる傾向にある。ただし、権力関係において下に位置づけられる場合でも、「っス」を付与することにより、男性登場人物の場合「うまい」の使用も可能となる。『大衆酒場ワカオ』4巻・五十九夜「ホッキ貝の浜焼き」では、男性が上司と思われる男性に対して「ホッキ貝って初めて食べましたがすごい旨いっすね!」と発する。中村（2020, p. 22）が「ス体」について、「丁寧体と普通体の区別を重視する『敬語イデオロギー』と、理想の男らしさを重視する『ジェンダー・イデオロギー』という二つのイデオロギーが密接にかかわっている」と述べるように、「うまい」に付与される「っス」は、登場人物の間に権力関係が存在するという文脈を考慮しながら、男らしさも演出する役割を果たしている。

つぎに、男性登場人物に「おいしい」が割り当てられる際、登場人物間の親疎関係が影響している場合がある。『孤独のグルメ』2巻・第3話「東京新宿区信濃町のペルー料理」において、個人で輸入雑貨商を営む井之頭五郎（男性）がペルー料理を食べた後、店主に対して発する「いやあ おいしいです」に注目する。第3話において、五郎は、ペルー料理の味覚をひとり言として評価する際には「うまい」を使用する（「どれもうまいぞ」「酸っぱうまい」「うまい」など）。しかしながら、料理を食べ終えて、店主に味を聞かれると、

「いやあ おいしいです」と発するのである。ここは、普段ひとりで誰とも話すことなくご飯を食べることの多い五郎が、珍しく他者と会話を交わす場面である。さらには、五郎と店主は、初対面であるため疎の関係にある。このように、疎の関係にある店主にペルー料理に対する味覚評価を伝達することは、くだけた会話でなされるものではないため、五郎には「うまい」ではなく「おいしい」が割り当てられたのだと考えられる。

また、男性登場人物に「おいしい」が割り当てられる際、登場人物間の権力関係が作用している場合がある。『忘却のサチコ』17巻・第162歩「切り抜ける！トラップだらけのアイランド・前編〈神奈川・猿島〉」で、編集者・小林心一（男性）が小説家・川端アリサ（女性）に対して発する「いやー美味しかったですね」に注目する。心一は、猿島に1軒だけあるレストランで幸子およびアリサとともに食事をする。そのあと、「いやー美味しかったですね」と発するのである。心一は男性であり、なおかつ新人編集者ではあるものの、大学生のアリサ（高校時代に小説家デビュー）と比較すると年上である。それゆえ、心一の性別および年齢を踏まえると、「うまい」が役割語として割り当てられる可能性もある。それにもかかわらず、心一は「おいしい」を使用し、さらには丁寧体の「です・ます」体でアリサに話しかけている。その一方、小説家であるアリサは、「だ・である」体で心一に話しかけている（「美味しかったねー」）。このことは、心一とアリサが男性であるか、女性であるかというよりも、2人の間に存在する権力関係（編集者と小説家）が重要視されている可能性を示唆する。また、心一は、先輩編集者である幸子との会話においても、「おいしい」を使用する。17巻・第166歩「踏み出せ！肩を並べるひとり立ち・中編」において、企画案が通らず悩んでいた心一は、幸子に連れられて竹田食堂に行き、サバの味噌煮定食を食べる。食べ終わった後に、「とても美味しかったです…／おかげでやる気が出てきた気がします。」と発し、幸子にお礼を述べるのである。ここでも、アリサに対する「おいしい」の使用と同様、丁寧体が使用されており、心一と幸子の権力関係が反映されていると言える。

#### 4. おわりに

本稿では、「うまい」「おいしい」といった味覚評価表現とジェンダーの関係性に注目し、グルメ漫画において、女性および男性登場人物に「うまい」「おいしい」が割り当てられる際の文脈を分析し、この選択が登場人物による社会的規範の遵守、あるいは逸脱と関係しているのかを考察した。分析の結果、女性登場人物の場合、「女性（らしい見た目の人）は女らしく振る舞うべきだ」という女らしさに関わる社会的規範が「おいしい」「うまい」の割り当てに大きく影響している（美味しさのあまり思わず口から「うまい」が出てしまう場合は、女性登場人物に「うまい」が割り当てられる）一方、男性登場人物の場合、男らしさに関する社会的規範よりも親疎関係あるいは権力関係に関わる社会的規範が「うまい」「おいしい」の割り当てに影響していることを明らかにした。しかしながら、男性登場人物に割り当てられる「うまい」「おいしい」が男らしさに関する社会的規範から全く影響を受けないわけではなく、3.2で述べたとおり、「うまいっす」などは、男らしさに関する規範とも密接にかかわっているとと言えるだろう。

本稿は飲食店系グルメ漫画5作品を分析対象としたものであるため、上記の結果が現代の日本社会全体におけるジェンダー観を含む社会的規範および味覚評価表現の使用実態を反映していると主張することはできない。それゆえ、今後は作品数を増やすことで上記の結果が他の作品にも当てはまるのか（ひいては、現代の日本社会全体の傾向を反映していると結論付けることができるのか）を明らかにしていきたい。また、飲食店系グルメ漫画だけでなく自炊系グルメ漫画にも注目することで、「うまい」「おいしい」の割り当てに関する新たな側面を明らかにすることができるのではないかと考えている。また、幼さを表象する「おいちい」の分析は、子どもに割り当てられる「うまい」「おいしい」の分析の必要性も示唆している。最後に、管見の限り、「うまい」「おいしい」を男女の役割語としてみなす研究はほぼなかった。しかしながら、今後は、グルメ漫画に限らず、その他のディスコースで男女に割り当てられる「うまい」「おいしい」の比率や割り当てられる文脈、そして味覚評価表現の割り当てに影響を与える社会的規範を分析していくことにより、

本稿が示したように、「うまい」「おいしい」が、女ことば・男ことば（知識）として、私たちのなかに取り込まれている可能性をより広範なレベルで明らかにしていくことができるだろう。

## 【注】

- 1) 本稿は、2023年7月15日（土）開催の日本語ジェンダー学会第23回年次大会における研究発表「グルメ漫画の男女登場人物に割り当てられる『うまい』と『おいしい』——割り当てられる文脈とは何か——」の発表原稿に加筆修正を施したものである。
- 2) 小林（2021）は、自然談話における親しい男性同士の話し方の出現状況に関する調査において、役割語としての男ことばと実際に男性が使用することば（特に、高年代）との乖離を指摘している。
- 3) ここでは、作者である安倍夜郎の公式ホームページ（<http://abeyaro.com/index.html>；2023年8月24日閲覧）における表記を採用している。
- 4) 古川（2013）は、日本語に訳された文学作品のなかで描かれる女性登場人物の言葉づかいを考察するなかで、社会で受け入れられた女性像を体現する登場人物には女ことばが、そうではない女性登場人物には女ことばから乖離した言葉づかいがあげられていると述べる。このことは、女らしさに関する社会的規範と知識としての女ことばの結びつき（裏を返せば、その規範からの乖離と女ことばからの逸脱の結びつき）を示唆している。

## 【参考文献】

- 稲永知世（2022）「女の『うまい』・男の『おいしい』——男性しか『うまい』と言わないのか？——」瀬戸賢一（編）『おいしい味の表現術』集英社インターナショナル，127-154.
- 金水敏（2023）『ヴァーチャル日本語——役割語の謎——』岩波書店.
- 郡千寿子（2017）「味覚表現の『おいしい』と『うまい』——ビールの広告用語からの検討——」『弘前大学教育学部紀要』117, 1-7.
- 小林美恵子（2021）「親しい男性どうしの話し方——『日常』自然談話への出現状況——」『ことば』42, 21-38.
- 小学館国語辞典編集部（編）（2006）『精選版 日本国語大辞典』小学館.
- 高崎みどり（2012）「“美味”を意味する語の使用と性差——『おいしい』を中心に——」『人文科学研究』8, 55-68.
- 中村明（2010）『日本語 語感の辞典』岩波書店.
- 中村桃子（2001）『ことばとジェンダー』勁草書房.
- 中村桃子（2020）『新敬語「マジヤバイっす」——社会言語学の視点から——』白澤社.
- 古川弘子（2013）「女ことばと翻訳——理想の女らしさへの文化内翻訳——」『通訳翻訳研究』13, 1-23.

グルメ漫画の男女登場人物に割り当てられる「うまい」と「おいしい」(稲永 知世)

古川弘子 (2024) 『翻訳をジェンダーする』 筑摩書房.

(いねなが<sup>3</sup> ともよ・佛教大学准教授)